

1. 課程・論文博士の別 課程博士
2. 申請者氏名（ふりがな） 江原 慶（えはら けい）
3. 学位の種類 博士（経済学）
4. 学位記番号
5. 学位授与年月日
6. 論文題目 資本主義的市場と恐慌の理論



ら考察してゆき、ここでは流通過程の不確定的な要因とともに、生産条件の差異も投資の誘因になることを示す。最後に、こうした二重の投資行動が相補的な関係にあり、それらを通じて社会的生産編成が履行されることから、均衡論的な市場においては想到されないような、ある一定の相場観が商品価格について形成されることを論じ、その価格に対する独自の規制力こそ、資本主義的市場における市場価値として再規定されるべきものであると論じた。

第3章「資本主義的市場の無規律性」では、個別産業資本によって全面的に構成される市場においてその無規律的性格を捉え返し、資本主義的市場の構造分析を締めくくる。『資本論』の随所に散見される、資本主義下での恒常的なばらつきに関する論及を、市場に内在した変動・分散として理論的対象としたのは、宇野の価値論の1つの特徴である。その後の研究では、資本が社会的再生産を包摂する以前の、流通論レベルにおいてそうしたばらつきが考察され、市場そのものに一物一価への形成メカニズムを認める「一物一価的市場像」と、そうした傾向を否定し全くのランダムネスを市場の特性と見る「無規律的市場像」とが戦わされてきたが、その対立は利潤論のレベルで結局生産価格が市場価格の重心として措定されれば陰に隠れる。しかし「無規律的市場像」を定置するならば、利潤論においても、資本による社会的再生産の全面的包摂が、無規律性そのものに与える影響が論じられるべきであるし、そのためには複数部門に複数の生産条件が賦存する生産構造が、個別資本にとってどのように立ち現れるかという市場と社会的再生産の臨界面を扱う必要がある。ここでは理論値としての生産価格による生産条件の優劣の定式化を試み、複数生産条件の物量関係如何によってはその優劣が逆転する場合が存在することを証明している。この状況は、固定資本の制約下にある産業資本にとっては、その部門で選択すべき優等条件が特定できないという生産条件の優劣の不可知性として現れ、こうした流通過程の不確定性とはまた異なる困難は、資本による社会的生産編成を偏向化させ、商品種別の売れ行きの格差を顕在化させる。これは全部門で優等条件が判然とし、売れ行きに応じて逐次的に資本移動が行われる場合に市場に現れる、個別商品の価値実現のばらつきとは区別される。かくして資本主義的市場は、それに包摂される生産条件の優劣のあり方に依りて、2種の異なる無規律性の態様を胚胎する。

第4章「恐慌の二因性——市場における恐慌の基礎——」では、以上の資本主義的市場の構造分析を、動態分析に適用し、恐慌の根本原因のあり方を再考していく。資本過剰に伴う労賃騰貴を唯一の根本原因とする宇野恐慌論は、恐慌現象を中心とした歴史分析を強固に基礎づけてきたところに特徴があるが、労賃騰貴への還元主義的思考は、原理論において資本主義的市場の構造がどんなに解析されてこようとも、結局市場の動態への関心を後景に退かせてしまう。そこでまず、労賃騰貴という契機は、恐慌の周期性・全面性・激発性の論証というより、好況末期から恐慌にかけての局面を、それ以外の景気循環の安定的局面とは断絶したものとして切り出すところにポイントがあり、そうした局面論的視角は、現在の商品過剰説に支配的な累積論的視角とは著しく相違することを確認したい。断絶的局面としての恐慌を、好況末期とともに別括する限りでは、労賃騰貴への限定に積極的事由があるわけではなく、蓄積過程のうちにそれ以外の不連続性の因子が潜む可能性が残されている。すると、宇野が有機的構成不変の蓄積として特徴づけた好況期は、その後固定資本の増設的蓄積として組み替えられ、その結果それは労働吸収的なプロセスである一方で、同部門内に複数の異なる生産条件が堆積していく生産条件の多層化を伴うこととなっている。この後者の過程には従来積極的な意義が見出されてこなかったが、それは資本の部門間移動を含みつつ進行する蓄積過程のうちに、生産条件の優劣の価格評価を個別産業資本に要求する一方で、生産条件のあり方に依存する価格体系の複雑化が、資本による社会的生産編成を阻害し、市場に機能不全をもたらす。これは従来型の労賃騰貴説からも、産業予備軍の枯渇がもたらす困難を精査すれば導かれうる事態であり、それゆえ価格評価の障害と産業予備軍の枯渇は、恐慌の根本原因として等位の理論的意義を与えられなければならない。

第5章「恐慌論における商業資本」では、資本主義的市場の動態を恐慌論の中軸に位置づけ直していく作業

の最終段階として、これまで宇野恐慌論の両輪をなしてきた蓄積論と信用論の動態の狭間に埋没しがちであった、商業資本の動態を掘り起こすこととしたい。そのためにまず、商品過剰説が市場の均衡を前提に蓄積過程の不安定性を析出しようとするのに対し、宇野原理論に見られる不確定的な市場のありようにこそ、商業資本の独自性を捉える視角が胚胎していることを見る。しかし、そうした不確定的な市場の変動・分散が価格の動きに還元されてしまうと、結局産業資本に起因する変動を商業資本が反映するだけの消極的な理解に止まることになる。商業資本の活動を産業資本の流通過程から峻別するためには、市場の変動・分散を物量的変動として捉え直し、そうしたボリュームを伴う取引が前提されねばならない。そうした発想の転換を経てはじめて、多種の商品を集積することから、好況末期に特有の信用力を発揮したり、産業資本のような固定資本を擁さないが故に、売り急ぎに迫られることなく商品の価格維持機能を果しうるといった、商業資本に固有の動態に焦点が合わせられることになる。このような商業資本の動向を伴う好況末期の市場の自立性は、恐慌の発現においても無視し得ない波及経路となる。